

らの声は妙に沈んでいる。思ひ当らない。「失礼ですがどなた?」しばらく間をおいて「今年高校三年のT子です。夜中で失礼ですが」進路について悩んでいるとのこと。家庭の事情により四年制の大学には行けないが、教師になりたいのだがと、とつとつと話していく。この子が進路について悩んでいるなんて夢にも思わなかつた。家庭的にも恵まれ何不自由なく学校生活をおくついているんだとばかり思つていたのに、それも三年まえに送り出した生徒がせっぱ詰まつて電話してきたのかと思うと年がいもなく、ついホロリとなってしまう。夢もあり希望もまたよし。しかし、現実はそう簡単でないことは理屈のうえでは分かつていても、どう考え、どう処理していつたら良いのか苦しんでのことだろうと思うと、すぐでもいつて真正面から話してみたくなる衝動をおさえ電話で話すこのもどかしさ。でき得るかぎりの助言をしたつもりであるが、その後のことはまだ知られていらない。教師生活の中からいろんなものを取り出すことはできるが、生徒のこととなるといつもぐと詰まるものがある。「ああしてやればこんな具合に」と日々反省の連続である。

「先生、A子の家から欠席の連絡がありませんので、ちょっと行って来ます」若い同僚が、朝の茶を飲む間もなくそそくさと出かける。またベル、今度はB男の母から「体がだるいと言つ



## 子どもに学ぶ 横山純子

ているから休ませると、「甘やかしているな、様子を見て来ます」別の先生。「先生、こういう時はどうやればいいですか」まじめな顔して聞かれる。一瞬とまどう。何年やつても教師という職業は「これでいい」なんでもないことを痛感させられる。しかし、迷つてばかりはいられない。自分の信念と情熱をもつて生徒にあたり、若い同僚に少しでも役に立てる先輩教師でありたいと思う今日このごろである。

今朝も静かな職員室。その静かさを破る電話のベル。何回も鳴り響いた。

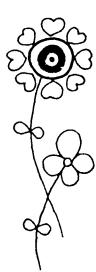
(臺多方市立第三中学校教諭)

たので、自由勉強のノートを買おうと思ひます」。ある日のM子の日記の一部である。

これまで走り書きのような字で朱書きを入れていた私の手は止まつてしまつた。言うまでもなく、M子のがんばりに心を打たれたからである。「またしてもやられてしまつた」と、四月から年生は、わずか七名である。家族的な親密感のある学校生活は、日々、触れ合いの喜びを味わわせてくれる。始めて小学校担任を経験する私は、それを一層強く感じるのかもしれない。しかし、日常生活はそう甘いことだけではない。少人数と言えども、一日中互いの人間関係のからみ合いに終始するのは同じであり、遠慮のいらない間柄にはそれが露骨に出ることも多い。また、教師の影響力も敏感にあらわれ、小手先の指導技術よりも教師の人間性の肝要なことを強く知られ、身の引き締まる思いをする。時にはどちらが先生だかわからないことさえあるが、そんな生活の中で子どもたちから学んだことは、「生きるたくましさ」であった。

働き者はM子だけではない。実によく仕事をする子どもたちが多い。「田んとお母さんが朝四時に起きてとつたたけのこの皮むきをやりました。夕方六時半から十一時までかかりました。なまぬるくて気持ち悪かったよ」と話をしけてきましたT男や、山のようなどうきんを無心になつてもみ洗いしているS子などの姿を目の当たりにする時、何とも言えない感情が込み上げてくるのである。

ところで、昨年まで家庭科を担当していた私は、子どもたちに生活に立ち向かうたくましい実践力を身につけてみたいと願つてきた。しかし、いくら手だけを講じても、家庭での生活経験の貧しさから、自主的に実践しようとしない子どもたちが多いことにもどうかを感じていたものである。ところが、目の前の子どもたちには、すでに、生活を築いていくこうと努力する姿勢が、家族への温かい思いやりとともに豊かに培われているのである。家族愛と地域の結びつきの中で、次代を担うたくましい子どもたちが着実に育まれている。このような子どもたちであるから、気性は少々激しく、言葉づかいも荒々しい。それでも私は、無性に好感が持てるのである。



(会津若松市立原小学校教諭)